

う 思 に り 祭 花

象 白 高 日

四月八日は恒例の花祭り、釈尊降誕の聖日という。仏教徒は毎年、この日を記念して祝賀の式典を行う。然し降誕という以上、釈尊が天上界から地上に降りて来たものだとか、釈尊は本来仏陀であられたのだが、人類救済のため仮りに人間として應現されたのだ、と思いこんでいる人が少くはない。

然しこうした考え方が釈尊を、我々人間とは全く懸け離れた超人とみなして偶像化してしまう。いや既に偶像化してしまっているのが現実だ。「縁なき衆生は度し難し」という諺があるが、釈尊を偶像のように「縁なき仏」としてしまっているのは、むしろ度し難き我々の方ではあるまいか。

釈尊は生まれながらの仏陀ではなく、また降誕されたのでも應現されたのでもない。我々と同じように人の子として生まれ、人の子として育ち、我々と同じ苦しみをいだき、苦しみと戦った。それは我々の想像も許さない深刻な苦しみであり戦いだった。その戦いに釈尊は打ち勝つた。そして仏陀となられた。然し戦いは続いた。人類救済への戦いだった。

人の子——仏陀釈尊、それは我々人間と同じ地平線の上に立つ、我々の大いなる理想像であり、且つ我々の苦しみの中に、戦いの中に、そして人生のすべての営みの中に、共に生きてきている。オギヤアッと生まれたばかりの赤ん坊そのものにも、花祭りの際の幼年釈尊の姿がある。花祭りは「天上天下、人はみな尊い」ということを教えているのであるまいか。

目 次 一

再刊 5月特集号 —

卷頭言 花祭りに思う 日高白象

積尊の懺悔

特集

鷺峰会の歩みと鷺峰誌の再刊について 編集部

イ鷲長街本
ン峰途頭誌
ド講の布の
へ習撃教
結会鼓の
ぶの行履行
も開脚開
の催

本本本驚身身體
信隱有妙隱
延仏舍利塔の建設
峰会九州道場の建設
發庵の行所退去の建設
の再刊移転

渡印太鼓の淨財勧募と

日本代表印度仏蹟巡拝団の募集 佐々木 妙定

八寸書コトナリ

ます国十に初れ…………猪瀬秀成
時代は人によつて…………中山穆彦
414

續集後

三

卷之三

-
42

煩惱をすてずに、△その一▽

釈尊の懺悔

日高白象



仏教では釈尊の御在世当時から布薩会（ふさつえ Uposatha）という行事がおこなわれていました。布薩会というのは、判りやすくいえば、個人と教団の純潔をまもるための、反省会だとか懺悔会といったような式事でした。

ことの起りは、釈尊が悟りを開かれて布教伝道を開始された間もない或る日のこと、釈尊に帰依していたマガダ国(ビンビサラ)の大王が、「仏教の教団も、発足当時より、次第に形が整えられて來た。ところでインド在来のバラモン教団では、毎月六回、多くの僧侶や信者の合同集会が

開かれている。この集会では、僧侶は法を説きあつて互いに研鑽し、信者はこれを聽いて信心を深め、仲間をさそって信者をふやしている。こうしてバラモン教団は、この種の集会を数多くたび重ねることによって、おのずから拡充している。

勿論、仏教の教えがバラモンの教えよりもすぐれていることはいうまでもない。だが教団の運営上、バラモンのこうした行事のやり方を見習うのも良いことではあるまい。それによって仏教教団も一層発展するのであるまいか」

「それは良いことだ」

と採諾されたことにもとづいています。

これまで教団成立の日も浅い釈尊のもとにあっては、ただ釈尊一人が仏陀として隨時隨所に法を説かれるだけであつて、定期的に説法の集会が開かれるとはありませんでした。まして仏弟子同志が釈尊のみ前にあって、自分の領解した真理を説きあう、ということはありませんでした。

思うに人間の精神というものは、自分で自分の心の中にしまつていただけでは、浮遊するもののように流れがちであつて、まだまだ自分自身の本当のものであるとはいいかねない場合も少くはありません。ところがこの自己の内なるものを他に対しても表現することによって、起きて来る反応や反響、それはどういう形のものであつても、その反応や反響と共に、ひとたび内より外へ出たものが、再び内へ帰つて来ることによつて、はじめてそれを自分自身のものとして確認することができるのであります。反応や反響が大きければ大きいほど、またその確認も深く強いものであるはず

です。

佛教における精神的な領解や悟りといった場合も同様です。釈尊の教えを、ただ耳に聞き、心に思つただけでは概念の遊戯にすぎません。その教えを他に対しても言葉として伝えようとする対決、実践しようとする行動、その意欲的な表現、表現のつみかさね、それによって釈尊の悟りの内容そのものが、釈尊の教えを媒介として、はじめて自分自身のものとなつて来るのです。

釈尊は、ビンビサラ人王の提唱を採諾されて、教団の月例行事に布薩会をもうけられました。然し、せっかくもうけられた布薩会の席上、みずから法を説き、人とも語りあうことの出来る仏弟子は、一部の有能な、ごく少数の者に限られていました。どの集会でもそうですが、集会という以上の布薩会は、一人の有能な仏弟子が波羅提木叉（はらだいもくしゃ Patimokha）という戒本を読誦し、他の仏弟子たちはこれを聴きながらみず

から反省し、もし戒に抵触したことのあった場合には、満座の前で懺悔するという形式に改められただのです。

またその回数にしても、寺院に定着していたバラモン教団にあっては毎月六回の開催も可能であったでしょうが、一個所に定着することをいまして常に布教伝道の旅の中にあつた仏弟子たちの教団にあっては、数回にわたる集会も自然不可能となり、何時しか半月に一回、月の十四日か十五日かに行われるよう改められています。

こうして布薩会は、人生と仏道における個人と教団の、その純潔をまもるための反省懺悔の場として、釋尊御在世中は一月も欠かすことなく继承され、またその純潔を期すること更に切要とするにいたった釈尊滅後の教団にあっては、ますます重要な行事となっていました。

今日の佛教教団の中には、どの宗派教団においても、どの寺院教会においても、布薩会らしき面影すら残つていませんが、それはおそらく人生と仏道における純潔、個人と教団における純

潔、それをまもろうとする意欲と反省も持ちきらず、汚濁に麻痺した無道心をさらけ出しているもの、といわれなくもないであります。

また今日の佛教各団の中には、既成教団といわゆる新興宗教といわず、管長・大僧正・教祖・会長といったような特権階級があつて、その教団を統制し支配しています。そして教団の組織が大きければ大きいほど、勢力が強大であればあるほど、その権力も絶大化しています。たとえそれらが民主主義・合議主義の上にたてられた教団の象徴であつたとしても、その特権意識はぬぐうべくもありません。

然るに釈尊御在世当時の教団にあっては、一人の支配者も特権者もいませんでした。釈尊自身としても無差別平等な教団の中の一人にすぎず、特殊な立場ではありませんでした。食べものも飲み物のも仏弟子たちと同じものをわかつちあり、着るものも同じ粗末な糞掃衣でした。布教の旅の中に寝る宿も、多くは林の中の樹の下の草の褥でし

た。仏弟子たちはその周囲の樹の下で三々五々に寝ころんでいました。長い長い旅の道でも釈尊は仏弟子と共に素足で歩いていました。

「善き友よ」

釈尊が仏弟子に呼びかける言葉は、何時もこうでした。そこには弟子・師匠という差別さえもありませんでした。後世、善き指導者とか高僧という意味をもつにいたった善知識という言葉は、実はこの「善き友よ」と呼びかけられた釈尊の人間平等感から転用されたものにすぎません。

一人の特権者も支配者もいなかつた釈尊の教団しかしその中には釈尊の人格が横溢し、釈尊の人格を通した正法は、人ごとに実践躬行され、教団そのものが釈尊の人格と正法を中心とした上求菩提の求道の場、下化衆生の伝道の場、文字通りの道場であったのです。釈尊の行かれる所、教団のある所、たとえそこが園の中であっても、林の中であっても、或は山谷曠野の中であっても、みな悉く道場であったのです。

これにくらぶれば今日のどの宗派にしても教団

にしても、釈尊御在世当時の教団の面影は少しもありません。躍動しておるべき仏教本来の生命は壮大な伽藍と巨大な組織の中に枯渇し、ゆがめられ果てしまっています。それは一に、慕うべき釈尊の人格を見失い、行うべき正法を踏みあやまつたためにほかなりません。

またこのために教団として本来あるべからざる特権者・支配者なるものが、管長・大僧正とか教祖・会長といった聖職の美名を騙ってあらわれてきています。然しこうした特権制度意識というのも、所詮、ゆがめられた教団を、ゆがんだままに運営しようとして施策された俗権意識と何ら異なるものであります。およそかかる俗権意識の中には仏法はありません。ひとたび管長・大僧正とか教祖・会長といった貌座につくや、大衆を見おろして仏法らしき言葉をつらねた説教のひとくさりでもしようかといった増上慢者の、その心の中に仏法のあるはずはありません。むしろ彼等は、ゆがめられた教団の頂点に立っているため、正法の実践者があらわれるや、それを憎んで

迫害しようとする三類の強敵の中の、僭上増上慢と化する可能性があるのです。

然るに釈尊は、唯我一人の仏陀であられながらいや仏陀であらるればこそ、日々夜々、常に、より一層深き懺悔に徹していました。月々に行われる恒例の布薩会の時のことです。一座を代表した仏弟子の一人が、教団で定められた戒律の一つ一つを読みあげゆきました。これにもとづいて一座の者が次々に立って、自分の犯した罪、犯そうとした罪については、みずから告白して懺悔し、また自分で気付かないでいる罪については、他の仏弟子たちに自由に指摘してもらつて、懺悔する運びとなりました。

この時です。誰よりも先に、静かに懺悔の席に立った人がいました。それはほかならぬ仏陀釈尊でした。釈尊は合掌した手を高くあげて、仏弟子たちに問い合わせました。

「我が友よ、私は今、みずからすゝんで汝等に尋ねたい。何ぞ私の言葉や行為において、批難すべ

きことを気付いた者はなかつたろうか。もしも気付いた者がいたならば、私のためにそれを指摘して欲しい。私はここで懺悔したい」

それは深い深い湖の底より湧き出て来るような澄みきつた声でした。しかもその声には、自分自身の一瞬の眼の動きの中にも、指さき足さきの動きの中にも、一点の曇りさえ見のがすまいとする厳しさが秘められていました。暫く沈黙が流れました。沈黙は批判すべき何ものもないことを意味していました。然しこうした沈黙の中には、

八世尊は正覚の仏陀であられる。仏陀にはもはや反省すべき微墮の煩惱もなく、懺悔すべき微墮の罪業もあるはずはない。然るに世尊は、何故かくも懺悔されようとするのであるか……

と、いぶかしがつた仏弟子もいたことでしょう。また中には、

八懺悔すべき何ものもないはずの世尊が、あえて懺悔しようとするのは、我々仏弟子のために懺悔の範を示し、それによって我々が、心から切実に懺悔することを、すすめられているのではある

まいか……▽

とも勘ぐった仏弟子もいたことでしょう。深い沈黙の中で、懺悔したいという釈尊の言葉は、同じように三度くりかえされました。然し誰一人として答える者はありませんでした。時に有能な仏弟子の一人が、座を立って釈尊を礼拝し、あふれる感動に語尾をふるわせながら申しました。

「世尊よ、我等は世尊の言行について、批難すべき何ものをも気付いたものはありません。世尊よ世尊は、いまだ生ぜざりし道を生ぜしめ、いまだ知られざる道を知らしめ、いまだ説かれざる道を説きたまひ、誠に道の生者、道の知者、道の導師であられます。我等は今ひたすらに、その道を尊び、その道に従い、その道に赴むかんとするばかりであります」

釈尊は深くうなずかれました。満座の中には、地底よりゆするような大いなる感動が湧き起りました。そして布薩会は次々に立って告白懺悔する仏弟子の上にくりひろげられてゆきました。それは何とおごそかな麗わしき情景であったことで

しょう。釈尊の崇高な温き人格が、すべての仏弟子の一人一人の、魂の中にしみ通り、皮膚にもあれ、言行として躍動していました。教育とはまさしく人格をもととした感化。布薩会は釈尊の人格感化の坩堝であったのです。

然しこゝで刮目しなければならないことは、釈尊その人が、仏陀として教團最高の地位、別格の地位にでもあるべきはずであるにもかゝわらず、それを否定して、なお教團の中の無名の一求道者と何ら変わらない立場に身をおかれていたということ、それのみならず布薩会に際しては、誰よりも先きに立って、列座の仏弟子を合掌礼拝しながら、「私に過失あらば、指摘して欲しい。私は懺悔したい」

と、その言葉を三度もくりかえされたということです。こゝに仏教教團本来の一切平等にして謙虚なる在り方が、布薩会における釈尊の姿を通して、もつとも具体的に、もつとも端的にあらわされている、ということが出来ましょ。

それにしても釈尊は、この布薩会に伝えられて

いるように、本当に懺悔しようとされたのでしょ
うか。若しそれが真実であるならば釈尊自身、懺
悔しなければならない過失を、知らず知らずの中
にも犯していたのではないか、とみずから思つて
おられたのでしょうか。このことは、
「仏陀でも過失を犯すことがありうる」

ということを物語っているものなのでしょう
か。そういう人でも、なお仏陀といわれるのでは
どうか。それとも、釈尊が仏陀であられたことも
事実であり、また釈尊がみずからすゝんで懺悔し
ようとしたことも事実であると認めるならば、
「釈尊は仏陀であらるればこそ、懺悔に徹してお
られたのである」

と、みるべきものなのでしょうか。若しこれに
もとすくなれば、

「懺悔なき仏陀は、真実の仏陀ではない」

と、いうことも可能なのでしょうか。仏陀の懺
悔——それは一体どのような原理にもとづいてい
るのでしょう。

思うに釈尊の生涯における懺悔は、たゞ布薩会
の時ばかりではありませんでした。インドの国で
は四月から七月にかけて夏三ヶ月のあいだ大へん
な雨期がつゞきます。雨期のあいだは伝道布教の
旅も困難でした。そこで、それ／＼の地方に布教
していた仏弟子たちは釈尊のもとに集つて、自分
自身の修業に専念しました。教団では、この期間
の修業を夏安居（げあんご）とも兩安居（うあん
ご）とも称しました。夏の雨期のあいだ安らかに
住居したからです。そしてこの安居のあけた七月
十五日には、自恣（じし pavarana）という行事
が開かれました。それは毎年一回、必ず開かれた
教団の年中行事でした。

自恣というのは、安居三ヶ月のあいだに犯した
罪を、互に告白しあい懺悔しあうことであつて、
その様式は殆ど布薩会と同じようなものでした。
然しその規模においては、釈尊に常随していた仏
弟子のほか、インド国中の各地に布教していた幾
多の仏弟子までも、八方から参加したものですから、
それは布薩会にもまさる大掛かりなものとな

つていました。參集した仏弟子の中には、おそらく幾月ぶりかに顔をあわせた者も少くはなかつたことでしょう。そして互いに懐旧の情をあたゝめあつたことでしょう。

この自恣の席上、釈尊は布薩会の時と同様に、誰よりも先きに座より立ちあがり、合掌の手を高くかゝげて、

「我が友よ、安居三ヶ月のあいだに私が犯したかも知れない罪やあやまちに気付いた者はいないか若し気付いた者があれば指摘して欲しい。私はこの場で懺悔したいと思う」

と仰せられたのです。仏弟子たちの沈黙も布薩会の時と同様でした。そしてこの沈黙を破つたのも、布薩会の時と同じく一座を代表した仏弟子の釈尊を讃嘆した言葉であったのです。

こうして自恣の行事が終ると、安居は解散され翌る七月十六日には、仏弟子たちは再び、それぞれの地方布教の任につくべく旅立ちました。旅立つて行く仏弟子たちの心中はおそらく、雨期三ヶ月ものあいだ、親しく釈尊のみもとにおいて修行

した充実感にあふれ、自恣による懺悔によって身も心も洗い清められて、大いなる伝道悲願にもえ立つていたことでしょう。

ところで自恣の行なわれた七月十五日といえばいうまでもなく盂蘭盆会（うらぼんえ——お盆）の日のことです。お盆の起りというのは、釈尊の十大弟子の中でも神通第一とうたわれた目連尊者が、餓鬼道におちて苦しんでいる母の靈を、安居三ヶ月ものあいだ、日々夜々一心に、自分の神通力で救おうとして、遂に救うことが出来ず、自恣の席上、涙ながらにこのことを告白して、みずから不孝の罪と、不徳の科（とが）とを懺悔しました。この時、釈尊は次のようにさとされました。

「神通力だけでは究極の救いとはならない。救いは仏道のほかにない。また同じ惡業の因縁で苦しんでいる多くの人々の中で、母だけを救おうとしたこともあやまっている。母だけでなく、母と同じ因縁で苦しんでいる六道の、すべての人々をも救おうとする大慈悲心、この平等の大慈悲心にも

とすく行為によってはじめて究極の救いがおとずれる」

目連尊者をはじめ居並ぶ仏弟子たちは歓喜しました。そしてさっそくこの教えに従って四衆供養をいたしました。お盆の起りは、こゝに由来していると伝えられています。

我が國のお盆は、こうした仏教の故事と、我が國古来の祖先崇拜の思想とが融合して、今日でも信仰の如何にかわりなく、国土の麗わしき風俗として伝承されて來ています。お盆の行事に先祖の供養をすることは、いうまでもなく尊いことであり、行なわねばならない大切な仏事ではあります。

然しながら、こゝでふりかえって考え方直してみなければならぬことは、お盆の起りというものが、実は七月十五日の自恣の仏事の中の出来ごとであったということ、そして自恣そのものが仏徒自身の、人生と仏道修行上における各自の罪と過失を告白懺悔したい、個人と教団社会における純潔を守る、ということを主体としたものであつ

た、ということです。

従つてお盆においては、たゞ祖先に感謝供養するということにとまるだけでなく、このお盆の時こそ、釈尊御在世当時に於ける自恣の根本精神にたちかえって、家庭においても寺院教会においても、仏教徒としての自恣の行事を復活させねばならないのではないでしようか。今や枝葉末節に堕ち入り形態化した現代仏教を、本来のものへ復活蘇生せしめる道も、実はこの平凡な日常生活の中の、こうした行為の中にこそあるのではないでしようか。

釈尊は、布薩会や自恣のたびごとに懺悔しようとされただけではありませんでした。八十才の二月十五日、クシナガラ城外、沙羅双樹のもとで御入滅されようとした時も、またそうでした。

釈尊の御臨終の間近いことを聞き知つて、驚いて駆せ参じた多くの仏弟子や信徒に對して釈尊はこれまでに説き残されていた教えの悉くを、説きつくされました。救うべき最後の人までも救われ

ました。さすがに釈尊は疲れていました。臨終の時はいよいよ追りました。この時このように申されました。

「我が友よ、私は今まで私の生涯を終ろうとしている。こゝに私は、私の八十年の生涯をかえりみて、懺悔すべきことがあれば、それを悉く懺悔し尽したい。我が友よ、私の生涯において私が犯したかも知れない罪や科に気付いている者があれば、それを今この場で直ちに私に指摘して欲しい私はそれを悉く懺悔し尽して、私の生涯を終りたい……」

仏弟子たちは沈黙に待って、たゞ悲泣慟哭するばかりでした。悲しみのあまり自分の頭をたゝき地に泣きころぶ者もいました。釈尊は三度同じ言葉を静かにくりかえされました。これにこたえたものは仏弟子を代表した阿難尊者の、釈尊をたゞえ釈尊との別れを悲しむ嗚咽の言葉でした。釈尊は大きくうなずかれました。そして瞼を閉じられました。

思うに釈尊が誰よりもさきに、みずから懺悔し

ようとされたのは、恒例の布薩会や自恣会の時ばかりでなく、日々夜々片時にも厳しく自己をかえりみられて、懺悔しようとされていたのではないかでしようか。そしてそれがまさしくそうであったればこそ、臨終のまぎわにおける一期八十年の生涯をかえりみられた總懺悔の言葉として集約されたのではないでしようか。

釈尊は仏陀であらねながら、なお懺悔に徹していました。いや仏陀なればこそ、凡人も及び難い懺悔の心を堅持されていました。たとえ兎の毛でつゝいたほどの罪・科さえなくとも、大衆に訴えてまで、それをたずね、それをゆるがせにせず、懺悔しようとされたのです。

これは一体どういう理由によるのでしよう。仏陀でさえも、罪や科を犯さしめる根源的煩惱の根は断たれてはいない、いな断つことは出来ない、ということなのでしようか。

結論に入る前に、次に「聖者の懺悔」の例として日蓮聖人の場合とイエス・キリストの場合とをふりかえってみましょう。

〔以下次号〕

みほとけの国造り

日高茂夫



筑豊地方といえば九州福岡県の北部、遠賀川の流域で、かつては石炭産業で全盛を誇っていた。今は殆どこの炭鉱はつぶれて昔の面影はない。

この筑豊に、県立自然公園上野峡（あがのきょう）という観光地がある。夏は観光客で賑わうが、よその観光地と違つて殆ど俗化せず、自然の風景をそのまま残している。

その山峠の中心部に、高さ三十五トルばかりの滝がある。白糸の滝といふ。布湯浴々として夏の涼風を呼ぶ。この滝壺の淵に行学道場がある。道場は滝の正面に建つてある。

私はそこの堂守り。今年七十四才。滝とその周辺は、公共のものであつて道場のものではないが、

「世の中で、これほどの滝と滝壺を正面にして、山峠全体を内庭にした家は、めったにあるまい」

と、よく人にうらやましがられる私も自慢の種にしている。然し掃除は並大抵なものではない。朝夕の掃除は私の日課としているが、秋の落葉はわき、冬の雪かきはまだしも、

夏の観光シーズン中、観光客の帰つた後の掃除には、無責任に散らして行つた人々に腹だたしくなり、情

けなくもなつて来る。

それは昨年の夏のことだった。こより二里ばかり離れた金田町福吉の子供会が、お滝に遠足でやつて來た。引率していた青年が名刺を出して丁寧に挨拶した。数十名の子供たちは滝壺で泳いだり、岩場を飛び廻つて、喜々として遊んでいた。やがて楽しいお昼のお弁当。その後、二時間ばかり遊んで一斉に引きあげて行つた。

「お爺ちゃん、さようなら」

「元気でね」

「また来るよ、バイバイ」

子供たちは口々に、そういった。後には紙屑一つ残されていなかつた驚いたことには、ほかの観光客の散らかしたものまでも、きれいにかたずけられていた。

大抵の観光客（それも殆ど大人）の帰つた後には、必ずといってよいほど弁当の空箱や空罐・空瓶・紙屑を散し放題に散している。団体の場合は目もあてられない惨状である。

観光遊楽に来た解放感のせいでもある。が、これでは公衆道德もヘチマもない。夕方のあとかたずけには、私はただでは二時間から三時間もかかる。いやそれが殆ど毎日のことだった。それだけに福吉の子供会のことが、スガスガしい印象として残った。

或る日、NHKのテレビを見ていると「或る人生」というシリーズの一巻として「筑豊の青春」と題した現地ルポが放映されていた。

それは再放送もされたが、京都のクリスチ教系の大学を卒業したばかりの青年牧師が、教会から派遣されたのでもなく、町から招聘されたのでもなく、みずから決意して故郷の大坂から廢坑の町と化した筑豊にやって来て、トラックの運転をしながら妻子を養いつゝ、その青春を賭して町の再建に尽していることを紹介していた。

その青年の名は、昨年の夏、福吉の子供会の引率者からもらった名刺

と同じであった。私は思わずカタズをのみ、心のたかるを覚えた。そして子供会の、あのスガスガしい印象を思いしながら、食い入るようにテレビをみつめた。

テレビでは炭鉱がつぶれたため、眩を失った廢坑の町の人々の、大人は生活保護法に頼り切って希望も気力も失い、青年はそうした町に絶望し、性へ眩を求めて次々に町を去つて行く中につけて、この取り残された町を再建することが如何に困難であるかを訴えていた。

然し私は、青年牧師の夢にも画いているであろう「神の国の建設」は既に町の子供たちの中に芽はえている、と心の中で叫ばざるを得なかつた。キリスト教でいうところの「神の國の建設」とは、仏教の「仏国土の建設」にも通ずるものであろう。理屈は違っていても、理想社会の建設という意味では同じことではあるまい。

上野峠より一里はなれた福吉の町

では青年牧師が神の國の建設のために青春を捧げている。七十四才の私が毎日滝の周囲を掃除するのも、地主のみほとけの國土の建設といえなくもあるまい。

今や私の掃除は、観光地の奉仕作業ではなく「みほとけの国造り」と思つて、朝に夕にホウキを持ち、屑をひろっている。しなければならない勤労奉仕の過重ともなれば思わず湧いてきていた腹立しさも情けなさも今はなく、すべてが感謝につらくなっている。

人々が散らして行った塵や屑を掃除するにも、掃除させて頂くという感謝の心をもつ時、それまで手も届かない遠い彼方にあつて思つていたみほとけの國までも、掃除する手足に全身に感触として味あわされて来る。

鷲峰会の歩みと

鷲峰誌の再刊について

編集部



このたび久しく休刊のやむなき状態にあった鷲峰誌（じゅほうし）を再刊するに当って、これまでの鷲峰会（じゅほうかい）の歩みと、本誌発行のあとをふりかえってみたいと思います。

布教部主任として、身延山の機關紙「みのお教報」を編集していた当時当局より突如一年間の東京留学を命ぜられた昭和三十七年の春のことでした。

その動機は、それまで毎日、昼となく夜となく、三々五々任意に主幹のそばに集つては、法門のこと、修行のこと、或いは法華經の世界宣布のこと、等々について語りあつていいました。そしてこうした学生僧たる身延山大学・高校の学生たちが、一ヶ年間の主幹との離別を惜しみ、

その留守中でも学生同志たがいに切磋琢磨すると共に、夏休みには、文永十一年の五月日蓮聖人が鎌倉から身延へ入山された聖路を逆にたどつて、身延山から鎌倉を経て東京まで撃鼓行脚して主幹にあいに行く、といふ話しあいになつたことにあります。

純心な学生僧の情熱は、燃え沸つていました。そしてこうした学生僧自身の道念を中心とした盛りあがりと、その結束から、法華經の世界広

鷲峰会が発足したのは、主幹日高白象師（以下主幹と略す）が身延山

既に日蓮聖人みずから諫曉八幡鈔の
結びに、

「日は東より出て西に入る、日本の
仏法の、月氏（インド）へ坂るべさ
瑞相なり」

と予言的に教示されているので、

この明文にもとづいて、釈尊が八ヶ
年間法華經を説かれ滅後仏舍利を留
められたインドの靈鷲山と、釈尊の
勅使である本化上行の日蓮聖人が、
九ヶ年の間法華經を説誦され滅後御
真骨を留められた我が国の身延山と
を、法華經で結び、兩國兩山一体の
血脉を軸として、「世界開顯」の実
をあげて行く。

（一）このため死身弘法の人材を養成
し三年一期の交代制で、インドを
はじめとする海外布教と国内布教
を展開する。

（二）その拠点として法華僧堂・行学

道場を身延に建設する。

（三）また文書伝道として「鷲峰」を
刊行する。

（四）会名としてはインドの靈鷲山を
鷲峰ともい、身延山もまた「本
朝の靈鷲山」といわれていると
ころから、兩山一休を期する目的
上、鷲峰会と呼ぶこととする。
というように、会名から目的・事
業までも申しあわされました。

そしてその年の夏、縝密なる計画
にもとづいて、身延東京間の擎鼓行
脚が展開されたのですが、計らずも
この行脚が、内外ともに予想以上の
成果をあげ又譽を呼び、その後にお
ける学校休暇ごとの、鷲峰会を主力
とした身延山別動隊街頭布教の蓋轍
となつたのです。

（五）また本誌が創刊されたのも、この

年（昭和三十七年）十一月でした。当時は隔月発行
（創刊号一六号）

（六）正月まで丸五年三ヶ月間、総計五卷
三十八冊でした。その概況を一覧す
れば、

第一卷 一昭和三十七年度 一冊
（七号一一十八号）

（八）これまで本誌が発刊されたのは昭
和三十七年十一月より昭和四十三年
正月まで丸五年三ヶ月間、総計五卷
三十八冊でした。その概況を一覧す
れば、

第二卷 昭和三十九年度 十二冊
（十九号一一二十五号）

（九）これまで本誌が発刊されたのは昭
和三十七年十一月より昭和四十三年
正月まで丸五年三ヶ月間、総計五卷
三十八冊でした。その概況を一覧す
れば、

（十）これまで本誌が発刊されたのは昭
和三十七年十一月より昭和四十三年
正月まで丸五年三ヶ月間、総計五卷
三十八冊でした。その概況を一覧す
れば、

第三卷 昭和四十一年度 七冊
（二十号より活版印刷）

（十一）これまで本誌が発刊されたのは昭
和三十七年十一月より昭和四十三年
正月まで丸五年三ヶ月間、総計五卷
三十八冊でした。その概況を一覧す
れば、

本誌の刊行

(二十六号——三十号)

二十八号より定価前承

送料二十五円

第五卷

〔昭和四十二年度 七冊

(三十一号——三十八号)

右の中、合併号も多々ありますが創刊以来の発行実数は三十八冊、大

体隔月発行とほぼ同じ数字になって

います。このたび昨年二月以来、休

刊を久しくしていた本誌を再刊する

に当つては、読者ごとに右の発行実

数にもとづいて納入誌代を清算し、

別紙の通り残高・不足高を御道知し

ましたが、お改めの上、つづいて御

購読をお願いする次第です。

さて本誌は所期の大きいなる目的を遂行する機関紙として、

一、教化面

1. 本仏釈尊を本尊とする日蓮教

学に関すること

2. 法華經の教義に関すること

3. 釈尊伝・日蓮聖人伝等の伝記

4. 聖語の紹介解説に関するこ

一、布教面

1. インドと身延を結ぶ実動等に

関すること

2. 街頭布教や行脚等に関するこ

と

一、体験面

1. 入信の動機に関するこ

2. 信仰体験に関するこ

と

1. 信仰相談に関するこ

と

2. 読者の声の紹介

といつた方針で編集し、全宗門を

刮目せしめるにいたつ鷲峰会の、

全国各地における果敢な街頭布教・

行脚布教・講演講習会の実績とあい

まって、本誌にも大きいなる期待がよ

せられ、またたく間に読者千名を越

え、賛助会員も百名近くになりまし

た。

然しながら毎年数回にわたって展

開された遠隔地方における一週間、

乃至三週間にわたる長期間の街頭布

教や行脚布教、そして本妙庵におけ

た。

街頭布教の展開

昭和三十五年正月以来展開されて来た身延本山の街頭布教は、日曜日を利用した日振り布教であつたため行動半径に制限がありました。

そこで鷲峰会としては、冬休み・

春休み・夏休みの年三回の学校休暇を利用して、休暇を返上して、本山街頭布教の及ばない遠隔地方に進出し連日長期間の街頭布教を展開しまし

る身延僧堂建設用地の整地作業、ならびに九州県立自然公園上野峠(あがのきょう)における鷲峰苑福智山行学道場の建設等々の目撃の行動には、本誌執筆編集上の時間をさかざるを得なくせしめられ、不本意にも合併号の発行とか休刊のやむなき事態になつたのでした。

次に以上の事由を、これまでの鷲峰会の歩みをふりかえる意味で略述してみましょう。

これは今まで毎年休暇ごとに実施されて来ましたが、その始めは昭和三十八年の正月、首って日蓮聖人が青年時代、十一年間留学された比叡山横川定光院の靈跡参拝を皮切りに吹雪について京都・奈良・大和郡山そして丹波の福智山まで展開したことになります。次の三月の春休みは、松本を中心とする豪雪の中の信州長野県下の布教でした。

何時何処の布教でもそうでしたが街頭行進・街頭説法は晴雨にかかわらず、スケジュール通り早朝から口没まで実施され、宿舎での講演・座談会は、ともすれば深夜に及ぶこともあります、睡眠不足も屢々でした。

布教とは、一期一会（いちごいちえ）しかも擊鼓すること説法するこのみが布教でなく、起床より就寝まで、隊員一人一人の一挙手一投足が布教でした。布教の終る頃、隊員各自の体重は殆んど一貫目前後も瘦せていました。

文字通りの死身弘法の実践、これ

をまのあたりにした人々は、心底を揺り動かされ、寺院は惜みなき協賛を示し、檀信徒の歓喜は熱狂的にまで高潮しました。

当然この感動は、現地の各所より人を通し手紙を通して、身延の本山当局へもたらされました。ここにおいて本山当局としては、鷲峰会独自の街頭布教を放任出来なくなり、本山布教部より派遣した別動隊布教といふ建前をとるにいたったのです。

これより別動隊の名称に対しても、本山側を本隊と呼ぶようになったのですが、本隊の街頭布教にしても、実は主幹が昭和三十二年十一月身延山布教部に勤務して以来、おのずから台頭して来た学生自体の街頭布教の成果を見て、昭和三十五年の正月より本山布教部が、学生に代って経費を負担し、企画指導権を握って実施するようになつたものでした。

鷲峰会にても事の起りは、日頃より主幹をとりまいていた学生自体の盛り上りと、結束によるものであ

って、主幹が会の中心的存在として全体を総監し指導しても、そこには何らの階級もなく一人の支配者もいませんでした。

然し本山が学生街頭布教を攝取するや、学生の下からの盛り上りは、本山の巨大な組織と階級の中に何時しか霧散して行き、必然布教が形式に流れる傾向となつて行つたのも、やむを得ない成り行きであったかも知れません。

こうした中にあって鷲峰会の街頭布教は、曾つての学生自体の盛り返しがいえなくありません。また木山派遣の別動隊という名称になつても、鷲峰会が主力となり、布教に関する企画実動のイニシャチブをとり原動力となつていました。

かくして鷲峰会は、この年（昭和三十八年）の夏休みより別動隊として身延山の「金看板」を背にして全国各地に布教を展開したのですが、この金看板によって、現地寺院檀信徒との折衝には確かに便利でもあり

有利でもありました。その反面、布教中の発言に制約はまぬがれず、言いたいことも言えず、答うべき質問に答えられない場合にも、少なからずあつたことでした。

次に別動隊として毎年三回定期的に布教を展開した、全国の地方府県名を列挙すれば、神奈川県・埼玉県・栃木県・静岡県・愛知県・三重県・奈良県・和歌山県・大阪府・京都府・兵庫県・福岡県・佐賀県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県そして北海道という一道二府十五県にわたりて、しかも各県内の主要都市は軒並みに擊鼓して、その時はかなりは、それぞの都市を法華一乗の法都と化しています。

たとえば神戸市内の布教の成果が今上天皇即位記念観音式以来三十五年ぶりの盛大さであったという一事をもってしても、他の府県下の全豹を推量することが出来ましょ。

なお布教は、大阪を中心とした関西地区、名古屋を中心とした中京地

区のように、反復実施された地方も少くありませんでした。

また福岡県や大分県のように、この布教を契機として宗務所を中心にして内全寺院の街頭布教専用の装備が整えられ、年中行事として独自の街頭布教が展開されるようになつたところもありました。

かくて驚峰会を主力とする身延山別動隊布教は、全国各地における立正安國運動を盛りあげながら、結果的には地方寺院檀信徒と身延山との結びを一層深めて行つたのです。

忘れられない布教中の想い出は数知れませんが、中でも比叡山中の膝を没する積雪の中、吹雪にさらされ滑っては起き、起きてはころびながら、それでも擊鼓して日蓮聖人遊学の靈跡へ参拝したこと……。

この一行の姿をまのあたりにした比叡山天台宗の一青年僧が、「まことの仏法こゝにあり」と感動し、直に山を降つて故郷九州へ帰り、近くの鎮西身延本仏寺の

門をたゝいて、日蓮宗僧侶として改宗したということ……。

或は埼玉県行田の市中で寒中の大雨にあり、すぶぬれになって擊鼓行進、駅前広場で焚火に暖をとりながら、凍りつく寒さに歯をガチガチさせながら街頭説法したこと……。

また或は夏の炎天下、愛知県・三重県・奈良県・大阪府・兵庫県と四県にまたがる十日間の布教中、三十五度を越える酷暑と連日の激労、そして睡眠不足のため、倒れる隊員が続出し、既に刈谷で倒れ、名古屋で倒れ、大阪の妙経寺についた時には隊員三十五名の中、およそ十名ばかりが枕をならべて医者の手当をうけている状態であり、残りの者も口さえきけないくらい疲労困憊しておりこれを出迎えた現地寺院檀信徒が、死身弘法を地で行く隊員の姿に胸せまり、中には感涙をおさえながら看護を尽していたこと……。

これら忘れ難い数々の想い出の中

が建てられました。それは昭和十九年の正月以来、福岡県街頭布教を年々くりかえす中、主幹の生れ故郷の「お題目の滝」の下に湧出した鷲峰苑福智山行学道場でした。

蓋し何はともあれ全国各地に数々の成果と、多くの想い出を残した街頭布教も、畢竟するところ、隊員として行動を共にした鷲峰青年の一人々々がみずから「擊鼓宣令・但行礼拝」という身業説法を通して、辛苦の大さけめれば大きいほど「眞の仏子」「眞の宗教者」「眞の口蓮門下青年僧」としての自覚を新たにし、この道にこそ生きるべき確信と喜びを深めたことに帰するであります。

長途の擊鼓行脚

定例の街頭布教にあわせて実施されたのは、鷲峰青年僧有志による长途の擊鼓行脚（ぎやつくあんぎや）でした。

この行脚のはじまりは、前述の通り昭和三十七年の夏のことでした。第二回目は昭和三十九年三月五日身延山大学を卒業したばかりの福知山の沢田・熊本の小寺・松本の藤森の三師が、社会第一線に挺身布教せんとするに当って、四月十日九州熊本の加藤清正の本廟である木妙寺を起點とし、身延山をめざして道中およそ数百里、その間、酒、タバコを断ち、一切車に乗らずに擊鼓唱題の行脚を開始しました。

一行が無事身延に到着したのは五月二十五日、丸四十六日間に及ぶ行脚でした。三人の衣も袈裟も汗とホコリにまみれ、顔は赤銅色に日焼けしており、足裏は一面に、幾重にも大きな豆が出来ては破れ、厚くなつた豆の皮が外にはみて、さながらお化けの足裏か、ワラ製ならざる皮製の破れ草履をはいているかのようでした。

次の行脚は、弘安五年九月、日蓮聖人が身延から武州池上へ向われた

富士山の西側廻りの聖路をたどる行脚でした。

このコースは、それまで殆ど人の通ったことはなく、資料も乏しく、実地踏査のほか究明の余地はありますでした。

昭和四十年七月二十五日、主幹の膝下で起居を共にしていた木妙庵の学生小林・渡辺・仲の三名は、関西・中京地区の街頭布教の終るや休む暇もなく、この踏査行脚の途につき道中十一日を要して八月四日、目的地に達しています。

蓋しこの行脚は、丁度三年前の同じ夏、富士山の東側廻りをした身延東京間の行脚とあいまって、これまで京内外でも、「日蓮聖人と身延山」という重要な事柄に関するものでありながら、左程的確にされていなかった日蓮聖人の身延入山と出山のコース、ならびに道中の縁起等をいさゝかなりとも以前よりは明らかにしており、日蓮聖人と身延山に関心をもつ人々に対して、貢献に資す

るところ少なからざるものがあつたと申せましょ。

なおこの時の一行は、東京に着き次第、その足で八月六日の広島原爆慰靈祭に擊鼓すべく西下しています。

さて次の行脚は、昭和四十二年三月のはじめ、立正大学を卒業した鷲峰会の木村・川島・法華堂の三師を中心として、日蓮宗本山真間弘法寺

僧堂の鈴木・大沢（日下渡米布教中の廣野・薬科大学の今野の両氏といふ計七名が、三月下旬、真間弘法寺を起点として日蓮聖人の身延入山のコースをたどった擊鼓行脚でした。

そして翌年三月立正大学を卒業した鈴木師が、再び学友を伴って同じコースの行脚を敢行しており、これより立正大学の有志学生僧の中では毎年三月、卒業生を中心として擊鼓行脚を継承し、立正大学の伝統とすることが申しあわされるに至っています。

然しいずれの行脚にしても、帰す

るところは身延に集中しております。脚隊が身延に到着するたびに本妙庵において、行脚隊の一行と、身延の学生僧有志二・三十名の者とが、互に法門を戰わし、立正安國運動の行動について論じあって、夜を徹することがならわしとされていました。

鷲峰講習会の開催

鷲峰会の運動は、外に街頭布教や行脚布教をするばかりでなく、内に行学講習会も開かれました。

もともと会の発足当初より学生同志間で毎週一回の布薩会が開かれ、主幹の講義がつゝけられていましたが、一般公開の講習会は、昭和三十九年三月、大阪府下の八尾市服部川の安国寺において、関西青年僧有志に呼びかけ三泊四日間、隣接都市の街頭布教とあわせて行われ、翌四十

年三月にも同寺で再開されています。

もとより本妙庵においては、昭和三十九年六月一日主幹がこゝに居を移してより、毎年三月と八月に四泊四日間、僧俗一体となつた行学講習が行われ、講習中、身延にほど近い倉ヶ平の滝、それは宗門最後の律師こうたわれた山本日躰上人の聞いた滝ですが、その滝の修行も行われました。

また本誌賛助会員である横浜市井土ヶ谷の大乗物産猪瀬社長宅では、四十一年十一月より半年の間、毎月一回「法華経講讀の集い」が開かれ主幹の「久遠のいのち」と題する連続講義の間には、立正大学の執行海秀教授も出講され「久遠の本仏と釈尊」と題して本尊論が講ぜられています。

この「法華経講讀の集い」は盛会でした。横浜市内はもとより東京都内よりも本誌の読者が參集して、毎回數十人を下ることはありませんで

インドへ結ぶもの

した。

さて、鸞峰会のかゝげた理想の中には「インドの靈鷲山と身延山を結ぶ」という一大眼目があります。蓋し此の両山を結ぶものは、仏法僧の三宝でなければなりません。

時あたかもインド靈鷲山においては日本山々主藤井口達上人が、一門を督勵して仏舍利塔の建設に尽瘁されていました。そしてこの宝塔の正面本尊として、身延山二十五丁目の三光堂境内に安置されていた白毫露坐の釈尊像と、同型の仏像が選ばれました。

幸い、これよりさき昭和三十七年の春、日本山の篤信者であり身延の大本願人であった東京三徳の社長堀内貞良氏（後、日本山に出家）が、二百数十年來の風雪のため解体寸前にあつた三光堂の釈尊像を、身延当局の承諾を得て、そのまゝ新しく復元するのに用いられた鋳型がありま

原型と寸分変らぬ青銅の釈尊像が堀内氏によって铸造され、日本山からインドへ送られるようになつていまし。因に仏像の高さは六尺七寸五分、重量百八十貫。

時にこのことを堀内師より知られた主幹が、

「その釈尊像こそ、身延山から身延山の名によつてインドへ送るべきではなかろうか」

と氣付き、堀内師と相談の上、山主上人に進言しました。上人は快諾されました。

されました。それは功を身延山に譲られたばかりでなく、身延山を「世界の身延山」にする悲願のためでもありました。

直に堀内師は、山主上人の意向を身延当局へ伝えました。当局は仏像渡印の費用を三徳が負担するならば……という条件のもとに了承しました。

そこで美願されたのが、靈鷲山仏舍利塔の胎内に「法身の舍利」として、永遠に奉安祭祀される銅版法華經の作製でした。

然し主幹が木山布教部に在籍している以上、この淨財勸募が身延の勸募と混同される恐れがあるため、主幹の名を秘めて京都教法院の三木淨達師、大阪の身延山特別大本願人岡本宗治氏、八尾の同大本願人南日常

堂（本師觀迦牟尼佛堂）内陣に安置されたのが昭和三十七年十二月二十一日、それより約二ヶ月間、身延に参詣した全国寺院檀信徒の参拜をうけ渡印のため身延山を出発したのが四十年一月二十三日、横浜より出港したのが翌一月一日のことでした。

氏、奈良の同大本願人達山あき子女史の四名が発起人として立ち、岡本氏・南氏の寄進によって作製は急速に進んで行きました。

作製の指導には、斯界の権威者である立正大学の宍木正亨教授が当り全国から出土して現存している藤原時代の、国宝銅版法華經四部に勝るとも劣らぬものを仕上げる意気込みでした。

ところが製作が既に全体の三分の一まで完成していた頃、どうしたわけか、突如身延当局より岡本氏に對して、「この事業は専い。然し貴方はそれから手を引くように……」との勧告があり、ために作製は頓挫、やがて事なればにして中断のやむなさに落ち入らざるを得なくなってしまったのです。

こゝにおいて代って発願されたのが日蓮聖人御在世中、多年の間みずから持経として奉持されていた「注法華經」の、その影本を再び身延山からインドへ送ることでした。

更に、この経巻の納經の塔にしても宍木教授の撰述によって京都鞍馬寺の国宝經巻塔の様式を参考とすべきことが話しあわれていました。

然し、矢張り主幹は発願者として

表に立つことは出来ません。そこで曾つて主幹が、身延山三十五日の信行道場の指導に当つていた時、道場生であつた佐々木妙定法尼を選んで一切を托しました。

前に銅版法華經の時には、関西の錚々たる発起人が四名もいましたが今度は出家して口も浅く、背丈も低い、たゞ一人の尼僧だけでした。

時あたかも池上本門寺の復興に対する苛烈なる陰の祈願も成就し、かねてよりインドの靈鷲山に対する宿世の因縁浅からざるものを感じいた法尼は、主幹の提唱を縁として、

決然として立ち上りました。それは

また写經石というのは、日蓮聖人の注法華經の渡印につらなって、全

宗門寺院檀信徒が法華經とお題目を写經し、その経石を靈鷲山仏舍利塔の胎内に納め、注法華經の經塔の周

願とするばかりでなく、更に日蓮宗全体をあげてインドの靈鷲山に詣び日印両国が一体となつて本仏教尊帰の実をあげるため、

一、直徑二尺六寸六分の大太鼓

一、直徑一尺のウチワ太鼓 三百張

一、一字一石の写經石

一、お題目の経石 五万個

開結十卷五部

右を作製して印度へ送ることを發願しました。この中、大太鼓六合と

いうのは、總本山身延久遠寺をはじめとして日蓮宗五大本山の池上本門

寺・小湊誕生寺・清澄山の清澄寺・

北山本門寺・京都の妙顯寺から、そ

れぞれ總本山・大本山の名において

一台ずつを靈鷲山へ贈ることでした。

また写經石というのは、日蓮聖人

の注法華經の渡印につらなって、全

宗門寺院檀信徒が法華經とお題目を

写經し、その経石を靈鷲山仏舍利塔

の胎内に納め、注法華經の經塔の周

西に敷きつめるためでした。

また三百張のウチワ太鼓は、靈鷲山へ参拝に来た現地のインド人をはじめ、すべての国々の人々にも、この太鼓をうつて登詣せしめ、お題目を唱えて祈らせるためでした。

法尼がこの誓願を起した時、迫り来る苦難をこえて、明けゆく宗門の前途を思い、世界にひろがりゆく法華經広布の未来を思いあわせて、主幹も共に吹き上げて来る感涙をぬぐうばかりでした。

それは昭和四十年三月三十一日祖廟参拝の帰途、たちよつた身延町仲町の若松屋仏具店内のことでした。これより全国に太鼓をうつて淨財勸募に東奔西走する法尼の姿が見られるようになつたのです。

兜木教授の監修のもとに経塔が、日本一の蝶型鑄物師の苦心によつて完成したのは昭和四十三年の六月二十九日でした。それは京都鞍馬寺の國宝經卷塔を原型としながら、それ勝るとも劣らぬ見事な出来ばえで

この間、注法華經十巻は国宝的古式の表装に改められ、また経石も開結十巻が五部とも揃い、お題目石は予定をこえて五万四千個、両者あわせて約四十五万個の経石が仕上つていました。

法尼の辛苦は筆舌に尽し難いものでした。たとえばこの経石にしても悉く紀州熊野灘の海岸の、加工すれば装飾品として売り出されている原石を、一つずつ拾つては磨き上げたものでした。

さて発願以来三年五ヶ月の歳月を経て完成された経塔が、注法華經の影本と共に身延山に献納されたのは四十三年八月十九日。同十月二十日には法尼のおとうと弟子である佐々木鳳定師が、この経塔と四十五万個の経石を奉持して、インドへ旅立つて行きました。

今、鳳定師は靈鷲山にあって日本山一門の僧俗と共に、本年十月二十五日インドの聖雄マハトマ・ガンダ

した。

一翁の生誕百年祭を記念する國慶の中の、国をあげての仏事として落慶式のいとなまれる靈鷲山仏舍利塔建設に従事しており、法尼もまた、この落慶式に六台の大太鼓と三百張のウチワ太鼓が間にあつよう、全國勧募の旅をつづけています。

なお落慶式には、身延の法主がインド国賓として招待されており、宗門からも百名近くの人々が参拝することになつていますが、名もなき一尼僧の淨業は、この落慶式に美をむすび、靈鷲山と身延山、日本と印度を結ぶ不滅の绊となつて行くことあります。

因に佐々木妙定法尼の住所は、

東京都大田区大森西六の八の二

電話（七六三）六七六九

これを機会に、紙上を通して読者皆様の、法尼の淨業に対する御声援・御支援をお願いするものです。

さて次に鷲峰会の運動の一環として本妙庵の備整・僧堂の建設にふれてみましよう。

醒悟園本妙庵の備整

醒悟園本妙庵は身延駅と身延山のほゞ中間にある身延町役場の北側およそ七丁ほど登った小高い台地上にあり、東に富士川、南に波木井川の合流する眼下にし、北には身延の峰、西には寺平の台地越しに鷹取の峰から七面山の山容まで仰ぎ、身延の祖廟のある西谷の谷あいは真正面という展望絶佳、身延第一の景勝を誇るところです。

こゝは開山本妙日臨法律師が、曾て文化十二年（時に二十三才）身延衆僧の白眼鏡に追われて京都へ赴き深草の鷺峰元政上人の、草山の清流をくみ、西能勢において自誓受戒の大相を整え、文政三年三月二十八日三人の弟子を伴って身延に帰り、波木井の遠藤孫七の外護によって一字を建立、醒悟園と名付けて子弟の育成に当り、文政六年九月十七日（時三十一才）水戸布教中、示寂に際

しては墓を本妙庵に建てるよう遺言されたところであり、こゝから「近代日蓮宗学の鼻祖」とうたわれた金沢充治園の優陀那（うだな）日輝上人が、本妙法律師の直弟子として輩出されています。

現在本妙庵には、法律師が修行された禪定窟や禪定石、或は手掘りの井戸や数点の遺墨が、昔のまゝ保存されていますが、日蓮宗僧侶として法律師の道風を追慕しない者はなく、日蓮宗信行道場生も三十五日の修行中には、必ずこゝに参詣することが毎年にならわしとされているほどであります。

もともと本妙庵は身延山の靈廟であるばかりでなく、全宗門の「僧風顯彰の靈場」としてうたわれて来ました。もともと本妙庵は身延山の靈廟であるばかりでなく、全宗門の「僧風顯彰の靈場」としてうたわれて来ました。

もともと本妙庵は身延山の靈廟であるばかりでなく、全宗門の「僧風顯彰の靈場」としてうたわれて来ました。もともと本妙庵は身延山の靈廟であるばかりでなく、全宗門の「僧風顯彰の靈場」としてうたわれて来ました。

主幹が本山より本妙庵へ移ったのは六月一日でした。これに伴って鷺峰会の事務所も本誌の発行所も本妙庵に移り、こゝを拠点として鷺峰運

昭和のはじめ身延の学生の失火によつて堂宇全焼するや、時の法主望月日謙上人の督励によつて直ちに再建された後は、現在身延大学教頭である室住一妙教授が二十数年来、こゝに居住し管理されていました。

然し教授が退去された後は、不便な山頂の一軒屋、天水生活の不自由もあってか住む人もなく、無住のまま廃屋同様に荒廃し、堂宇の内外はもとより法律師のお墓も、禪定窟も井戸も、靈跡らしき面影さえ偲ぶことも出来ないほどの荒廃ぶりでした。

たまたま昭和三十九年の五月、信行道場生七十五名を引率して本妙庵に参拝した主幹が、その荒廃の甚しさを嘆き、本山当局に進言するや、五月十一日当局より主幹に対して、本妙庵の住居管理が委嘱されたので

動が急速に活発化していくと共に、日曜日ごとの身延学生の勤労奉仕によって靈跡らしく整備されて行きました。

同年九月十六日律師の縁日に、日蓮聖人の尊像の開眼供養がいとなまれ、秋十月六日池上本門寺貫首伊藤日定上人をはじめ身延の同窓生數十名の本妙庵参拝をひかえて、堂宇の大改修が行われました。

大マンダラが奉安されたのもこの時でしたが、翌四十年四月八日の花祭りには、ガンダーラー仏像を原型とした説法相の、釈尊像の入仏開眼式がいとなまれています。

その頃、既に本妙庵には数名の学生僧が主幹と起居を共にし、登校にも下校にも一里の道を擊鼓して、鬼道場の名にもふさわしき僧堂の氣風をたゞよわせていました。

身延僧堂の建設

本妙庵は手狭くなりました。他よ

り參籠修行者が来た場合は、寝る所も困るようになり、定期の講習会や機会をみて十名、二十名と学生の來た場合、僧室は熱気にあふれ、修行の太鼓の音は、遠雷の如く麓の町々へ鳴り響いていました。

この熱氣に引きつけられるように或は響きに応ずるかのように、波木井三区全体が一丸となつて、委員会を結成しました。その趣旨は、

(一) 本妙庵の横の台地に、身延仏舎利塔と、青年僧を養成する身延精

堂、並に一般青少年を練成する行

学道場を建設する。

(二) 本妙律師の入滅百五十年祭を昭和四十八年に迎えるに当つて、小鳥も暮つていた律師の托鉢姿の銅像を建立する。

(三) また右のため第一期工事として麓より合地の中腹までの道を、更に本妙庵まで延長し、第二期工事

として本妙庵より身延山の裏参道（県道）へつなぐ台地上三キロの道路を新設する。

といったことでした。それは主幹が本妙庵に米つて丸一年を迎えた四十年の夏の頃より、区民の中から自然に起つたことでしたが、はやくも

その年の秋には、県と町よりの助成金に、賛助会員中よりの特別寄附金を加えて、道路建設資金が集められ、道路建設資金が集められ、ブルトーザーを使って本妙庵までの第一期道路工事が、またまくまで完成

し、更に勢いに乗じて本妙庵周辺に譲渡された二千坪の用地の中、約半数の千坪をブルトーザーで整地して台地の上に大広場が出来てしまつたのです。

一方、本誌の休刊や合併号が目立ちはじめたのも、この頃からでした。学生たちは学校より帰れば、ブルトーザーの残した用地の整地に鍬をふるい、或は食糧を補うため、開墾しては耕作していました。

それは、やがては建設されるであ

ろう、いや何時かは必ず建設されねばならない身延僧堂・行学道場建設への、遙かなる夢と大いなる希望をはらんとふりあげていた鍊でした。

その後、整地作業は本妙庵に在住する数名の学生僧によって、暑い夏の日にも、寒い冬の日にも連日つけられ、休暇中の街頭布教の合い間に、朝から晩まで土運びが行なわれていました。そしてこうした苦斗の中に、学生僧自身の堅固な道念がおのずからつちかわれていたのです。その主なる者は小林・沢田・川島・渡辺・浅見・仲・小畑・坂口・小野といったメンバーでしたが、この中より昭和四十三年六月十日羽田空港より單身南方タイ国へ渡って行った者がいました。

それは四十二年三月立正大学を卒業とともに、東京身延間の行脚をして以来、本妙庵で本誌の編集に当っていた川島本良師でした。

夫人が身元引受人となっていましたが、渡泰の目的の中には、タイ国王室の発願によって世界隨一の佛教大學が建設されようとする氣運の中に、一乗法華の天鼓を轟かせること、並にタイ国に仏教が伝来して以来、連綿として守られて来たタイ国佛教僧堂の中より、学ぶべきは学んで、新しく建てられねばならない日本仏教僧堂の構格を完成する、ということが數えられていました。

ともかく師のタイ国伝道は、後につく青年僧によって、インドと日本を結ぶ中繼地となることでしょう。現在師の住所は、

Rev. Honryo Kawashima

c/o Dhammagnasee Bhibat Bldg.
Wat Paknam Bhasicharoen,
Thonburi Thailand

よって一変して間もない昭和四一年の春、東京三徳の堀内貞良師が擊鼓して来山されました。

そして本妙庵開基檀越遠藤孫七以来、代々の世話人である遠藤喜男氏を常同して、この台地上に建立される身延仏舍利塔敷地の検分をされた上、

「さうそくにも仏舍利塔建設運動に着手すること、小宝塔は三徳が責任をもって建立する」

ということになりました。

然しこのことも、身延當局の強い反対にあって、中断されてしましました。反対の理由は、

「既に身延山では、祖師堂の裏山を削つて整地し、本院の日本建築と調和する仏舍利塔として、五重の塔を建てる計画であるから、本妙庵で先き走つて仏舍利塔を建てないようにならぬ」ということでした。

これには反駁の仕様もありませんむしろ随喜すべきです。若しこれが

身延仏舍利塔の建設

さて本妙庵周囲の台上が、整地に

実現するならば、これまでの身延山

久遠寺本院における建物の中、釈迦堂と祖師堂が並んでいて、祖師堂の方が釈迦堂よりも遙かに大きく、ために口では如何に釈尊本尊を説いても、建物からみれば蓮本尊という印象のぬぐいもなかつた弊を一擲して、久遠実成の本師釈迦牟尼佛を本尊とする、久遠寺の名にふさわしき縁本山となりましよう。

然し元来五重の塔というものは、寺門の中では仏舍利を奉安する最も尊い建物として、聖徳太子が建てられた奈良の法隆寺・大阪の四天王寺をみても一目瞭然としているように、寺院敷地の中心部に建てられ、講堂・經藏・庫裏といった諸堂は回廊でつないで、五重の塔を囲むように建てられていたものでした。

ところが後世になると、何時しか五重の塔は、境内の一隅に移され、寺門の軒轅の美を添える装飾的建物と化してしまいました。釈尊中心の信仰が、祖師中心の信仰へ移って行

った証拠でもあります。

身延山にも明治の大火で全焼するまでは、本院の裏山の、奥之院へ登る参道のそばに、五重の塔は建つてました。このたび、せつかく祖師堂の裏山に建てようと計画される五重の塔は、それを復元するような小規模のものであつてはなりません。少くとも、身延山諸堂の中心大

塔として、祖師堂よりは大きく、祖師堂も、祖師の御真骨堂も、膝下にふんばえるような、そして一丈六尺の立像釈尊像も安置出来るような、豪壯なる日本一の五重の塔が建てられねばなりません。

若しこれが実現するならば身延の五重の塔は、目下日本全国に日本山つないで、五重の塔を囲むように建てられていました。

木造建築の五重の塔であるならば、防火・風雪にどれほど堪えられるか、という問題もありましようが建てるならば、たとえ半世紀の歳月をついやしても、以上のような気宇広大なるものでなければなりません。本妙庵のバゴダ式仏舍利塔は、それから建てても決して遅くはないのです。

然し時は迫っています。本年十月二十五日のインド靈巖山仏舍利塔落

慶式典をめざして、既に身延山から身延山の名において釈尊像も渡り、注法華經の經塔も渡り、そして大太鼓も今まさに渡ろうとしています。

この気運を逸すれば、身延山が国際的靈巖山となる機会も遅れることがあるでしよう。機運を逸すまいとすれば、どうすればよいのでしょうか。本妙庵では、建てようと思えば既に整地された台地上に、建てられるばかりになつておらず、各國大使を身延にまねいて、國際色豊かな定礎式をあげる可能性もあるという

に……。

鷲峰会九州道場の建設

鷲峰会九州道場——詳しく述べ

福岡県田川郡赤池町上野皿山、県立
自然公園上野皿（あがのきよう）鷲

峰苑福智山行学道場——このとおりですが
こゝに鷲峰道場が出来たのは、実は

赤池町が主幹の生れ故郷であり、主
幹が中学時代の昭和十三年、十六才

の時、上野渓の中心部である「白糸
の滝」の上流、人もかよわぬ幽谷の

中に、豪壯な一布澤を発見、昭和十
六年の夏、十九才の時、立正大学の

休暇中、二十一日の間、炭焼業にこ
もって、この布澤の岩壁に岩題目を
刻み込み、九月十一日に完成、戦後
もしばしばこゝで修行していたこと

に遠因していました。

降つて昭和三十九年正月、身延山
別動隊を中心とする初めての福岡県
下の街頭布教が展開されて以来、こ

れを縁として毎年主幹が福岡県の布
教に西下する中、四十一年の八月十
四日、岩題目の滝の名を、日蓮聖人
の「我れ日本の柱とならん……」と
いう三大誓願にもとづいて「誓願の
滝」と命名しました。

その折、かねて贊助会員として鷲
峰会の運動展開に献身的な協力を惜
しまなかつた八幡竜潛寺の松尾周輝
師・門司大雄寺の刀禪義昭師・柳川
台照院の宮崎隆道師が中心となつて

主幹と協議の上、上野渓が観光地で
あるにもかゝわらず、殆ど俗化せず
に小耶馬渓の如き自然の美を保つて
いるのを幸い、白糸の滝の前の一軒
家を入手し、これを修行のための参

籠所として、すぐそばの景勝の地に
僧風教育を主体とした青年行学道場

を建設することが発願されたので

す。

さっそく一軒屋は同年九月十一日
所有者との間で譲渡契約が成立し、
翌四十二年六月一日より百日間の青

年僧の修行が展開されました。その

主なメンバーは立正と身延の太学を
卒業した熊本の小寺・東京の川島・
北海道の木村、身延大学在学中の小

畠、立正大学在学中の鈴木・清水、
そして渡印の経塔建立発願者の佐々

木（鳳）、高校の教師で渡米留学待
機中の富村といった諸師でした。

さて上野渓は福智山の麓ですが、
その全山は今より千三百年前、白進

白鳳時代に金光明院教順法師によつ
て開かれ、平安朝時代には伝教大師

が、山頂において入唐求法の祈念を
こらし、坂朝後、再びこの山頂に登

つて報恩のため法華経を講じ、鎮護
国家の国傳を修しており、その跡が
今なお大塔石として残っています。

そこで百日行は福智全山を法華経
の靈山にするという眼目をたて、竜
潛寺青年会の応援を得て六月十一日

福智山頂（海拔九百メートル）と隣
接の鷲取城跡に、それぞれ三大誓願
を建立。つづいて七月十九日には鬼

子母の滝の前に、七月二十一日には

白糸の滝の真正面に、七月三十一日には巨大な天狗岩の前に、そして遂に八月二十一日には誓願の滝の前にそれぞれ宝塔が建立され、その間、

道なき所には道を作り、橋・ハシゴをかけて、誰でも安全に急坂・断崖を登り、渓流が渡れるようにされました。

以上六基の宝塔の開眼式は九月一日に厳修されました。この日、出仕した僧侶は管内寺院をはじめ二十数名、各地より貸切バスで参集した寺院檀信徒は、およそ数百名にも及び、地元より赤池町長をはじめ町会議員・観光委員等が参列、さしもの滝の前は人波に埋まり、読誦する経文、唱える題目、打ちならす法鼓は谷から谷へ、峰から峰へと、山峡全域にこだまして行きました。おそらくこの日は、福智山開闢以来、未曾有ともいわるべき法華一乗の盛儀であったことでしょう。

なお翌四十三年には、行学道場建設用地として白糸の滝の周辺およそ

一千坪と、仏舍利塔建設用地として上野駅バス終点近くの丘陵およそ一千坪が入手されています。

本妙庵の退去

昭和四十一年の春、本妙庵に仏舎利塔の小宝塔建立の話しお起つた頃突如身延当局より主幹に対して、

「本妙庵の任期は一ヶ年間」

という通達がありました。室住教

授は二十数年間も居住し、その後は塵屋同様に荒廃していた本妙庵を再建しつつあったのに對して、この通達の理由は考えられないところでし

然しこのため最も不安がったのは本妙庵在住の学生たちでした。「いざという場合の、身のふりどころを考えておくようになら」と主幹にいわれた学生の中の一人小林君は、既に大学を卒業していたので修行の旅に出ることにし、在校生の渡辺・浅見・仲の三名は東京の立正大学へ転校する腹をきめました。

何故、任期を一年という短期間に限られたのか……その理由を敢えて考へれば、主幹の行動が、すべて前向きであり、しかも急進に過ぎて、五千ヶ寺の寺院を擁する日蓮宗の總本山とは、テンポに誤差を生じ、そ

の誤差が月日と共に行動の上に、顕著になってきたからか……といえな

然し当局より退去命令の出ない以上、たとえ一年任期にせよ「再任をさせます」という慣例もあることです。主幹も退去命令の出るまではと覚悟し、本妙庵在住中にしておかねばならない仕事、整地作業に全力を注いでいました。

昭和四十三年十月十二日、この日は御会式でした。御会式に賑わう本山において、「一年任期は、もうとっくに過ぎてきている。来年の三月は年度替りだから出来るよう、今の中から心がけておこう」と……」

という当局の内命が達せられました。時あたかも日蓮聖人御入滅の御会式です。主幹はこれを「天の声」として受けとりました。そして同時に、昭和三十二年十一月三日以来、九十一年五ヶ月の長きに亘って、身延山を本とする全国布教に尽瘁しました。本山勤務も、辞任する決意を定めました。

悲壮感も悲感も感傷もありませんでした。十一年五ヶ月の間、家庭も自分自身もかえりみず、布教に人材養成に、そして僧堂建設に尽して来たすべてものは、消えるものでもなく、失われるものでもなく、すべて生きています。

主幹なきあとも、学生たちは学生自体の街頭布教を、みずから護持しつつ展開して行くことでしょう。また確保した本妙庵の周囲二千坪の土地も生きています。

その土地の中には、主幹の先祖のお墓が、九州の郷里より移されており、主幹も骨となれば本妙律師のお墓の横にほおむられることになつています。

この土地は、もはや単なる物質ではなく、鷺峰青年僧をはじめ、惜しみなき協賛を捧げられた全国各地の会員の方々が、心血をそいだ「祈りの土地」げに正法広布と「世界の身延建設の祈り」をこめた土地であったのです。

このことを熟知している地元波木井の全区民としても、委員会を中心にして、たとえ主幹が本妙庵を去った後でも、所期の方針通り、本妙庵の道路を本山の裏参道へと延長敷設して、やがては建てられるであろう身延僧堂・行学道場等々の建設準備を整えて行くことでしょう。

日蓮聖人は三度鎌倉を追われて三度鎌倉に坂つています。本妙律師も一度身延を追われ身延に坂つており日蓮聖人も律師も共にお墓を身延に建てさせています。主幹もまた身延を去つて身延へ坂つて來ることがあるでしょう。そして身延勤務を辞し本妙庵を去つた以上、乾坤一擲、自由活達な布教が起されることでしょう。

本誌発行所の移転

「主幹は本妙庵を去つて、何處へ行くのか?……」

これは驚峰会としても地元波木井の区民にしても、また全国各地の会員にとつても大きな問題でした。

主幹が黙して語らざる中、波木井の区民の中から、

「本山と團交して、退去の内命も、一年任期という速成の内規も、撤回してもらおう。さもなければ、本妙庵はもともと波木井のものだったのだから、波木井に返してもらおう」という強硬な与論も起りました。

勿論これは主幹によって思い止められました。また一部の賛助会員の中には、

「この際、身延練院をされては…」という意見も出ました。然し今はその時ではありません。世間も宗門も泰平ムードに安住していく、そこには日蓮聖人の時代のような蒙古襲来とか、国内の紛争、餅饅・疫病の頻発といったような、逼迫した社会的危機感がないからです。

若し十年前のような創価学会の身延攻撃が、その後、ますます激化し

て今日にまで及んでいたならば、おそらく主幹は身延を去らしめられるどころか、創価学会折伏という法戦の陣頭に立たしめられていたことでしょう。

すべて時です。時を遡らばなればなりません。今は諫院の時でもなく、留まる時でもなく、去る時が米たのです。本山の迺達の有無にかかわらず、まさに去るべき時が来ていましたのかも知れません。

思えば、日蓮聖人は三度回家を凍め伯夷・叔齊の故事にならって鎌倉を遠く去り、甲州身延の山中へ分け入られました。また本妙律師の法脈を継承した明治の「最後の律僧」山本日誦上人は、山梨県令によつて所を追われ、学問所まで建てて子弟の養育に当つていた身延の近くの倉ヶ平の滝を去り、遠く九州の郷里八幡へ転び、ここに龍満寺を建立しています。

このことを思いあわせば、主幹もまた身延を遠く、更に遠く、去つ

て九州郷土の山峡へ散るべきでしょうか。その山峡に既に驚峰苑行学道場が建てられようとしていたのも、或は仏意によるものであったのでしょうか。

時に、大分県臼杵の法音寺加藤顯嵩上人より、菅内の某寺院住職として招聘する相談がありました。上人と主幹は特別な関係があり、別動隊の大分県街頭布教の折は全面的な協力を尽され、個人的には法音寺秘蔵の海松の如意が贈られていきました。

この如意棒は日本山々主藤井日達上人の出家得度の師僧である法音寺の先代住職が、常に愛用し弟子と大喝するにも用いていたものでした。則ち法音寺は藤井日達上人の出家得度の寺でした。またこの寺は現身延法主藤井日静上人の、先祖の菩提寺でもありました。めぐる因縁の不思議さを思はざるえないことです。

ここにおいて主幹の決意は定まり加藤上人の厚意を謝しつつ上野峠へ去ることとなりました。それは一切

の束縛より脱して鷲峰会の悲願をつらぬくために身延を去ることでありました身延へ販らねばならない使命があつたからです。

主幹が上野峠へ転居すると共に、

必然本誌の発行所も上野峠へ移つて行きました。主幹の家族は、東京にあって鷲峰東京道場建設計画を進めていますが、時いまだ熟せず、身延の学生とも遠く離れて、暫し九州上野峠の山麓の中に独居するに至つた主幹が、なおこの山峠の中より全国布教を維持展開する道は、街頭布教や僧堂建設のため久しく休刊のやむなき状態にあつた本誌の再刊と、その拡充に専念することでした。

然しその資金は、従来通り今後も変わらない年間三千円の賛助会費の志納、並びに再刊後一部につき定価七十円・送料二十円、半年分五百円、一年分一千円と改正された誌代納入によつて、本誌の運営が円滑になるまでは、有志の方々の格別なる御理解によつて毎月本誌を発行することに一万円・五千円・千円という、再刊とその維持に対する特別なる御援助がよせられるのを待つほかはありませんでした。

このたび再刊第一号として五月特集号を発行することが出来ましたがこれとて、かかる特別賛助のたまものにはかなりません。

今や身延を去つて遠く九州の山峠に発行所を移した本誌は、たとえ将来再び身延へ販る方針ではあっても、ややもすれば地方誌とみまちがえられやすいものです。

本誌の再刊は、主幹が三月身延を去つた翌る新年度より、再刊第一号として毎月発刊されることとなりました。

本誌の再刊

むしろ以前にもまして本誌のため、一層の御支援・御賛助を惜しみなくされる方々に對して、衷心より深く感謝申上げると共に、その御期待に添う決意を、更に新たにするものです。

また、以上のように繰々述べて来た「鷲峰会の歩み」のため、合併号の発行も屢々であり、休刊も久しかった本誌に対し、それを御遺想の上、今日まで御賛助・御購読をつづけられた方々に對して、深くお詫び申上げると共に、甚深の感謝を披瀝し、且つ今後とも交らぬ御賛助・御購読を御願い申上げる次第です。

なお送料は規格内の封筒の場合二十円なので、これを用いて二十円と可された場合六円となりますので、その節は一部九十円の誌代は、そのままえおき、送料の差額十四円分をもって頁数をふやし鋭意内容の充実を計る方針です。その点、御了承

下さいますよう、あわせてお願ひ申上げます。

さて本誌の編集方針は、今後とも創刊当初より変わるものではありません。然し主幹の膝下には、今までのよう青年僧はおりませんので、やもすれば主幹の単独執筆になる恐れがないとは申せません。

そこで読者の寄稿や読後所感等のお便り、殊に学生僧、青年僧の投稿を掲載して行く方針でありますのでこれもあわせて御協力を願いします。

やがてインドより佐々木師、タイより川島師、アメリカより大沢師、富村氏も叛朝することでしょう。そして本誌上も、現地の報道や所感に賑わうようになることでしょう。

以上、冗長にすぎる感もありましたが、本誌再刊に当つて、昭和三十七年三月までの丸七ヶ年間の「鷺峰会の歩み」を回顧してみました。

この回顧によつて鷺峰会の全貌も

明らかにされたことでしょう。またこれによつて殊に宗門学生僧・青年僧が奮起されるれば幸いとするところです。

主幹は今や北九州の福智の山峡にこもり、山靈を友として一人、読説執筆の日常を送ることとなりました。が、然し東京では鷺峰会東京道場の建設が進められ、また身延では波木井の台地に僧堂と青年道場の建設が進められていますので、やがて主幹が山を下つて東京・身延そして九州を往復することも頻繁になつて来る事であります。そしてその往復の間各地において布教を展開する時もほどなくやつて来ることでしょう。

そうした時、曾つて横浜で開いた

「法華經講讀の集い」のような法座が各地各所にもうけられ、本誌をテキストとした布教が行われるようになります。されば幸いです。

本誌も、そういう時の到来を念願し、その時を招來するよう編集され行くことでしょう。

(終)

引 越 し と 再 刊

本誌再刊第一号は四月号の予定で執筆し、原稿も印刷所へ廻していたのですが、その後、身延へ帰つて本妙庵の荷物を整理するに当たり、急に悉くの荷物を本妙庵より出して東京道場と九州道場へ送らねばならぬようになり、このため予想以上の日数を要したため、四月号を五月号と改めねばならなくなつました。五月号でありながら、謹頭言に四月の花祭りの記事のあるのはこのためです。

それにしても今度、本誌の印刷を引きうけて頂いた田川市の相良印刷所社長、相良亮一郎氏は、私の中学時代の級友であり私を故郷に迎えて、本誌の印刷にも絶大なる奉仕をもつて協力されました。ここに紙上を借りて謹んで感謝するものです。

△白象▼

渡印 太鼓の淨財勧募と

日本代表印度仏蹟巡拝団の募集

願主 佐々木妙定



お釈迦さまが法華經を説きあらわされたインドの王舍城靈鷲山における仏舍利塔落慶大法要は、本年十月二十五日（午前中）インドの大統領はじめ一国の指導者を網羅し、各國の大公使等々世界中の代表を集め、その数およそ十万余と予定される仏滅後三千年未曾有の大式典として挙行されることが確定し、日蓮宗管長身延の法主猊下も国賓として招請され、巡拝団をともなって渡印されることになりました。

「日は東より出て西に入る。日本の仏法、月氏（インド）へ還るべき瑞相なり」

と仰せられた日蓮聖人の七百年前の予言は、今まさに実現されようとしている、と申上げても決して過言ではないと存じます。

実は、この日のため不肖私、昭和四十年三月三十一日、日蓮聖人御使用の「注法華經開結十巻の影本」と、これを納める「経塔」並びに「法華經十巻五部の経石」と「五万巻のお題目の経石」更に「二尺六寸六分の大太鼓六台」と「一尺のウチワ太鼓三百張」を靈鷲山に奉納することを発願し身延山法主猊下をはじめ、日蓮宗総長猊下、日蓮宗五大本山の貫主猊下等々の御推薦をたまわり、

爾来四ヶ年間、まず注法華經を納めた經塔と經石をインドへ送るべく、日本全国に淨財勸募の行脚を続けさせて頂きました。

幸い仏祖の冥加と、全國寺院・檀信徒皆様の理解ある御支援・御援助、並に製作者の献身的御努力、製作監修指導に当られた斯界権威者方々の惜しみなき御協力によつて、注法華經の古式の表装と經塔は、日本美術・工芸品として世界に出しても恥かしくないほど見事に完成し、昨年八月十九日身延山奉納の儀式が厳修され、身延山から身延山の名のもとにインドへ渡り、本年正月元日、靈鷲山の所在するビハール州知事をはじめ州の閣僚・ナーランダ大学生等々およそ六百数十名の参列する中、元旦の御来光を期して靈鷲山頂に、莊嚴なる「獻納の儀式」が行われ、經塔と經石は、仏舍利塔の塔中深く納められたのでござります。

この国際的な「獻納の儀式」につきましては、既に本年二月一日発行の日蓮宗新聞の第一面に大々的に報道されていますので、御存知の方も多いことと存じますが、仏祖報恩のため、広宣流布のものなのです。

次は靈鷲山へ六台の大太鼓と三百張のウチワ太鼓を贈ることです。ここに六台というのは、身延山久遠寺をはじめ池上の本門寺・小湊の誕生寺・清澄の清澄寺・北山の本門寺・京都の妙顯寺といふ日蓮宗を代表した總本山と五大本山から、それぞれの名によって一台ずつ靈鷲山へおくるものであります。また三百張のウチワ太鼓とは、常時靈鷲山にそなえておいて、ここへ参詣に来た現地の印度人はもとより世界各国のすべての人々が、一人一張ずつ持つて、太鼓をうちならしあ題目を唱えながら仏舍利塔にお祈りが捧げられるよう計らうものなのです。

靈鷲山へ太鼓をおくりましょう

ため、そして身延と日蓮宗の名誉のため、事ここまで成就することの出来ましたのも、ひとえに全国各地の皆様の陰に陽に御協力、御支援、御賛助下さいました贈物と、深く深く感謝申上げる次第でございます。

経塔と経石は、既に、大塔々中に深く納められているのですから、平素これを塔外より礼拝できても、塔内に入つて見ることも触れることも出来ません。然し太鼓ならば何時でも触れることが出来、うつことも出来ます。直径二尺六寸六分という大太鼓が六台も列んでいる偉容を見れば、誰でも一度は触つてみたくなるものです。触るだけではなく持ちたいと思えばウチワ太鼓があります。触れたり持つたりすれば、自然うちならしくもなりましょ。太鼓をうてば響きに応ずるようにおのずからお題目も唱えられることでしょ。そしてみずからうちならす太鼓の音と、みずから唱えるお題目の声は、その行為と共に必ず人々の心田深く響き渡り浸み通つて行くことでしょ。ここにたくまさる下種結縁の正法宣布が起り、計り知れない無量の功德が積まれて参ります。そしてこの太鼓を贈つた身延を本とする日蓮宗と、靈鷲山を本とするインドの国、並に靈鷲山へお参りしたすべての人の國々とが、太鼓とお題目によつて結ばれ、通一仏土の仏祖の悲願は、事相をとど

のえて來ることでしょ。

このように確信した私は、「日本の仏法、インドへ還る」という日蓮聖人の予言のまにまに太鼓献納の誓願を起しておりました。ところが経塔と経石に思わぬ歳月を要し、はやくも落慶大法要は目睫に迫つてしましました。太鼓の献納は、この世紀の式典に間にあわせねばなりません。私は直に立つて再度の全国勧募の行脚をはじめたのでござります。

なお六台三百帳の太鼓の値段と、これをインドへ送る運賃は、合計して総予算六百万円と計上されております。

なにとぞ全国の皆様、仏祖の願行をたすけて、経塔・経石につづくこの淨業に御参加たまわり、再度の御協力・御支援・御賛助下さいますよう、また有縁の方にもすすめられて御功德をお積み下さいますよう、御薦め申上げ御願い申上げる次第でございます。

靈鷲山へお参りしましょう

本年十月二十五日インドの王舍城靈鷲山において厳修される国際的な仏舎利塔落慶大法要に、日本宗管長身延山法主猊下が国賓として招聘され渡

印されるに当つて、猊下に随行するインド仏蹟巡拝団が募集されております。

この巡拝団は、國賓の法主猊下に随行いたしますので、現地では大法要の際、日本国の正式代表団として接待されることになります。

お駕迎さまが御誕生されたルンビニー園、成道されたブツダガヤ、初転法輪の鹿野園、法華經を説かれた靈鷲山上、御入滅されたクシナガラ等々の仏蹟巡拝は、希望すれば何時でも出来ます。ですが、靈鷲山上、千載一遇ともいわるべきこの世纪の大式典に、日本代表团の一員として参列される栄光は、後にも先きにも今度の、この機会だけです。どうぞこの好機を逸することなく巡拝団に御応募・御参加下さいますよう御薦め申上げます。

仏蹟巡拝コースは希望者に応じて、左記の通り三種に分れていますが、いずれも十月二十五日の式典参列を中心として組まれたスケジュールでございます。

左記

一、 インドコース(自二十三日間) 総経費 三十八万八千円
二十九日間 総経費 四十四万六千円

一、 セイロンコース(自二十一日 至十一月二十九日) 羽田発
十一月二十一日 羽田着

一、 短期コース(自二十九日間) 総経費 四十四万六千円
十二日間 総経費 二十二万五千円

巡拝団の詳細御希望の方にはカタログをお送りします。参加御申込み方は優先的に巡拝団事務所へ御取次ぎいたします。官製ハガキで御申込み下さい。なお、靈鷲山に献納する太鼓の淨財寄進の御申込み、並に巡拝団参加の御申込みは、左記へ御願い申上げます。

東京都大田区大森西六の八の二

佐々木 妙 定 電話(七六三)六七六九

まず国土に祈れ

猪
頰
秀
成

勿論、個人の安心立命なくして、世界全体の平和はありません。然

「江戸の詩人宮川賀治も『世界全体が幸福にならなければ個人の幸福はない』と申しています。日蓮聖人の思想とその運動の根幹をなしていたものは立正安國の大精神でした。成道後の釈尊の生涯もまた山林に閑居するのでなくインド国中の遊行伝道でした。

私が入信以来二十数年、私淑していた恩師(故)井上清純先生の生涯の雄叫びまた即ちこれでした。先生の遺書「如是我聞」「六大部疏」の御愛読をおすすめします。御申込は、

たのですが、この街頭における撃
鼓宣令こそ在りし日の日蓮聖人の
英姿を彷彿せしめ、日蓮宗の精華
を遺憾なく發揮せしめたものはない
でしよう。それは百万陀羅の雄
弁にも勝る身業説法でした。

今後も街頭布教は、身延山を本をして全国的に展開されていくことでしょうが、考えねばならないことは集団の力を頼むばかりでなく、志ある者は日常個々にでも、常にこれを実践しておらねばならないということです。これが、いざ集団行動の場合における真の底力となるのです。

そこには人類に極る祝尊の姿があります。個人の安心立命—それは人類に祈り、國土に祈るを先とする信仰でなくてはなりません。

ともすれば個人の幸福と繁榮のみをこととする信仰の通弊を一擲

私が心から日蓮宗は素晴らしいと感動したのは、身延山街頭布教の堂々たる大行進をまのあたりにしまた私自身も家族をあげて、この行進に参加したときのことでした。それ以来、大阪に街頭布教の展開するたびごとに、進んで企画にも実動にも、参画させて頑いてき

街頭擊鼓宣令

宮本龍

釈尊道成後、入信した六十名の
仏弟子に對して「二人して行くこ
となれ」と個々に各地の伝道へ
旅立たせた理由は何であつたか。
宗門青年僧の三思して奮起されん
ことを切に祈るものです。

(身延山本廟人・宮本商會社長)

時代は人によつて

中田穂彦

NHKの「天と地と」というテ

レビを見ても、古今の偉人の伝記をひもとも感することは、時代が人を創り出すのではなく、その時代の中には、時代を創り出しているといふことです。

私の仕事はプリキ印刷工場の経営ですが、あの巨大なオートメー

チークの機械も、実は人によって動かされているのです。そして工場が今や業界のトップに立つに至ったのも、先祖の遺徳と、従業員の和合と勤勉、そしてその底辺に流れている信仰精神のたまものにはかなりません。

やもすれば機械文明に人間性を喪失したり、時代環境に流され

ようとする時、人間性の回復は自分自身に確信を持つことではないでしょうか。その確信は日常茶飯事と一茎の花にも命を感じ情愛を感じることに始まるのではないか

時代の流れは千変万化、瞬時も油断は許されません。然し人間の根源的尊厳は古今變りなく、これを愛の行為として現わした人が、その人なりの環境の主となり、ひいては時代の主となっているのだ

(大成プリキ印刷KK社長)

家庭の成仏

長谷川才藏

乱れ、争いの本となります。み仏を尊び、御先祖様に感謝し、家族互にいたわりあう心に、既に幸運では西日本随一と指折られていました。私の店は仏壇の製造・卸しと直売では西日本随一と指折られています。私が店は仏壇の製造・卸しと直売では西日本随一と指折られています。私が店は仏壇の製造・卸しと直

ますが、ひきもきらぬお客様には、人の目にふれない家の奥に安置する仏壇や仏具を、見栄や外聞で求める方はおられません。

特に家財道具の中でも仏壇仏具を最も尊ぶお客様の、報恩感謝の念にふれるたびに、その家庭の幸福と繁榮を思い、社会が明るくなつてゆくのが感ぜられるものです。誠に仏壇は家庭の中心であり、家庭成仏の木と信じて、人のため世のため奉仕させて頂いていますが、仏壇が次々に引き取られて行くたびに、み仏の世界の瑞相がこの世に整えられて行く喜びを思ふものです。

(長谷川仏壇店社長)

希望の方はいません。その中心は物や金銭ではなく心にあります財産を中心とする時、必ず家庭は

本誌賛助者御芳名

金 一万円也

横浜市南区井土ヶ谷中町一六一

大乗物産株式会社

猪瀬秀成殿

神奈川県 船越琴子殿
千葉県 小川静枝殿

毎月五千円特別賛助者御芳名

一金、一万五千円也（三回分）

東京都江東区

置名者殿

一金、一千円也（二回分）
千葉県 広野利彰殿

御本人の御希望により
特に住所御芳名を伏す

横浜市 内田淳子殿
東京都 長谷川照容殿

年間賛助会費志納者御芳名

一金、三千円也

宮本商会

北海道 有賀義雄殿
東京都 竹田妙光殿

再刊特別寄附者御芳名
一金、十万円也

東京都太田区

匿名者殿

然として惜しみなき賛助の意をあらわされ、さっそく発行資金として、特別御寄附をされた方々、並びに毎月一万円・五千円・一千円

というよう御援助を申し出られ、それぞれ御志納された方々、及び創刊以来賛助会員として毎年三千円の御援助をされ本年度分を御志納された方々に対し、次に御芳名をかけ衷心より感謝の意を表します。

左記

毎月一千円特別賛助者御芳名
一金、三千円也（二回分）

福岡県直方市古町銀天街
長谷川仏壇店

長谷川才蔵殿

関根栄次殿

御本人の御希望により

特に住所御芳名を伏す

★本誌再刊——ようやくこの運びとなりました。皆様と共に喜びをわかれます。★と同時に、これまで本誌上、本尊論に健筆をふるわれ、親しみも深かつた立正大学教授文学博士執行海秀先生が、昨年十二月四日、本誌の再刊も見ずして突如遷化されたことに對して、謹んで哀悼の意を表し、皆様と共に先生の御冥福をお祈りして報恩に資したいと思ひます。★先生は立正大学の浅井要麟先生・望月欽厚先生につづく日本神教学の権威者として自他ともに評され、特に本尊論と曰蓮聖人御遺文の文献批判は、宗門教学史上にも異彩を放っていました。★先生と私は共に九州出身、法脈上の叔父・甥の関係にあり、大学時代より先生の自宅で親しく教学上の薰陶をうけ、今日までおよそ三十年近くも親戚のよき交誼にあすかっていました。

★かねて私の教学上の主張が、一部

の人々の間では特異なものとして取り敬慮されたりすることも屢々でしたが、実は私の教学的主張の基盤は全く執行先生によつて与えられ築かれたものでした。★先生の遷化は宗門の教學上、惜しみてもあまりありませんが、幸い先生の生前の講義を録音したテープが数卷、私の手許にありますので、これを原稿に改めて本誌に掲載し、皆様に紹介すると共に世にも残しておきたいと思います。

★かけがえもない恩師の突然の死によって、人間の命のはかなさが心底にしみて來ますが、この死を遁して、先生の生前ににおける教学の重みが計り知れないほどに感ぜしめられるものです。★先生は一見、背も低く、風采もあがらない、態度も女性的な、学究タイプの人には見うけられませんでした。然しひとたび教學のことに関するや、獅子王の如く毅然とし、弁説火を吹いて、一寸の妥協も許しませんでした。★「出家

の身は、元来仏の使いなり。世を異れ、人に媚びて、これを言わば道立た」という日蓮聖人の言葉を思い出さしめる人でした。△白象△

鶯峰 五月号

昭和四十四年 第六卷再刊二号
通巻二十九号

昭和四十四年五月一日発行

定価 七十円 送料 二十円

発行兼編集人 日高白象

印 刷 所 相良印刷所

発 行 所 鶯峰会

福岡県田川郡赤池町皿山上野峠
鶯峰苑 福智山行持道場

電話赤池(有線)一の一五

振替口座 福岡〇一五八

郵便番号 八二一

誌代 六ヶ月 五百円(送料共)

特別賛助会員費 一千円(送料共)

普通賛助会員 一千円

鷲峰会発行

出家の身は
元來仏の使いなり
世を畏おそれ人に媚こよびて
これを言わば
道立たず